

「敵をゆるす」(サムエル記上二四章一〜二三節)

1 逃亡

聖書でもっとも大切な言葉の一つに和解という言葉があります。和解です。互いの心が和らいで仲直りすることです。もちろんその言葉が大切だというわけではありません。和解という事柄、神と人との和解、人と人との和解など、聖書の使信^{メッセジ}の中心に関わるものです。

今日の聖書箇所は、さし当たり、この和解という言葉で、全体を捉えることのできる場所ではないかと思えます。

これまでの学びを振り返りながら、今日の箇所に入りたいと思えます。先週は一八章、今日は二四章、途中五つ章を飛ばしていますので、その間のことも含めて最初に申し上げておきたいと思えます。

サムエル記で私どもが学んでいるのはダビデの生涯です。ダビデが王に即位してからのことはサムエル記下が詳しく記しています。王になるまでのことがサムエル記上に記されています。

一人の羊飼いに過ぎなかったダビデが将来王となるべく神に選ばれ、そのしるしにサムエルから油注ぎを受ける。彼は若くして戦士として頭角を現し、いつのまにか王サウルをしのぐほどの実力・人気をそなえるようになります。サウルは当然面白くない。サウルの中に妬みの心が生じ、ダビデをひそかになきものにしようとします。先週私どもが上一八章で見たことです。

サウルはダビデをペリシテとの戦いの最前線に出して、自分は手を下さず、いわば間接的に殺してしまおうと何度も画策します。自分の二人の娘、長女メラブ、次女ミカルもそのために使われます。けれども企てはことごとく失敗し、裏目に出て、結局、ダビデが王の次女ミカルを妻とし、王の婿におさまる、つまり王位にいつそう近づく結果になるのです。

間接的なひそかな、こうした殺害の計画は失敗し、サウルはますます面白くなくなつたと思えます。しかしなきものにしようという思いは変わりません。むしろエスカレートしていきます。サウルはダビデ殺害の意志を直接周囲にもらします。上一九章一節にこうあります。

サウルは、息子のヨナタンと家臣の全員に、ダビデを殺すようにと命じた。

こうしてサウルとダビデの関係はいつそうとげとげしいものになっていきます。それが今回割愛した一九〜二三章です。ダビデはサウルのもとから逃亡することを余儀なくされます。

聖書を見ると、一人で逃げ回っていたのではないようです。逃亡中のダビデのもとに、彼の兄弟や父の家のものたちが、加えて「困窮している者、負債のある者、不満を持つ者も」(二二・一〜二)周りに集まってきて、彼はその「統領」になつたと書いてあります。六百人規模の軍団にまでなつていたようです(二三・一三)。サウル

のイスラエル正規軍とは比べものになりませんが、最後までダビデと労苦をともにした集団です（二九章）。

この逃亡の期間、ダビデが何とか逃げ延びることができたのは、じつはサウルの息子、長男ヨナタンの助けにもよることでした。今日はヨナタンのことに触れられないのは残念ですが、ヨナタンがダビデと厚い友情に結ばれ、自分の父のゆえに苦しむダビデを自分のことのように思いやり、ときに父に執り成し、ときに父を欺いてまでダビデを助けます。この美しい友情物語も一九〜二三章は伝えています。

2 誘惑の声

さて逃亡中のダビデの側に、サウルを返り討つ絶好の機会が巡ってきます。ダビデがエン・ゲデイの荒れ野にいますという情報がサウルにもたらされ、彼はえりすぐった三千の兵を率いてそこに向かいます。予期しなかった出来事が、「羊の囲い場の辺りに」あった洞窟で起こります。

サウルはイスラエルの全軍からえりすぐった三千の兵を率い、ダビデとその兵を追って「山羊の岩」の付近に向かった。途中、羊の囲い場の辺りにさしかかると、そこに洞窟があったので、サウルは用を足すために入ったが、その奥にはダビデとその兵たちが座っていた（三〜四節）。

偶然というべきでしょうか、摂理というべきでしょうか、奥行きのある複雑で大きな洞窟、サウルが用を足すために兵士たちから離れて入ったその奥には、ダビデとその兵たちがいたということです。総勢六百人ぐらいと先ほど申しました。彼らがひそんでいられるほどの広さでした。

千載一遇のチャンスとはこのことをいうのでしょうか。サウルを討つ、これこそ神の思し召しだと思った兵士たちはダビデに、次のように言います。

主があなたに、「わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。思いどおりにするがよい」と約束されたのは、この時のことです（五節）。

こうした声を背中に聞きながら、ダビデの取った行動、語った言葉はこうです。

ダビデは立って行き、サウルの上着の端をひそかに切り取った。しかしダビデはサウルの上着の端を切ったことを後悔し、兵に言った。「わたしの主君であり、主が油を注がれた方に、私が手をかけ、このようなことをするのを、主は決して許されない。彼は主が油を注がれた方なのだ」。ダビデはこう言って兵を説得し、サウルを襲うことを許さなかった（五〜八節）。

これらの記述は、一方でダビデの複雑な心の内を示すとともに、他方で彼ののはっきりした態度を明らかにしているもののように思われます。

複雑というのは、こういうことです。「ダビデは立って行き」とあります。いまがその時、サウルを討つべしという兵士等の声に押されてダビデは立っていったように見えます。ところがそのまま行つてサウルを討つということをダビデはしなかったのです。その代わりしたのは、上着の端を切り取るということだけでした。それだけでも彼は良心の呵責に苦しみます。このことに触れてダビデのちにサウルに呼びかけの中でこう言っています。

あなたを殺せと言いましたが、あなたをかばって「わたしの主人に手をかけることはしない。主が油を注がれた方だ」と言い聞かせました。・・・わたしは上着の端を切り取りながらも、あなたを殺すことはしませんでした（一一―一二節）。

「あなたを殺せと言う者もいましたが・・・」。この「言う」というところは口語訳では「人々はわたしに・・・勧めたのですが」と訳し、他の訳では、「わたしはそ、そのかされたのですが」（ヘルツベルク）と訳しています。つまりダビデにとって、サウルを殺せという兵士の声は、そそのかしであり、誘惑の声であり、まさに悪霊のささやきと聞こえたのです。

その声をダビデは排して、反対に兵士たちに、主に油注がれた方に手をかけてはならないと説得したのです。

なるほど、サウルは明らかに落ち目です。主の霊も彼を離れた。おそらく何をしても挽回することはできないでしょう。しかしサウルも神の御心によって王として立てられたのです。いまサウルを容易に殺すことはできた。しかしそのことは、自らの手で王となるということであって、結局は、神に逆らうことになるのです。ダビデは断固として神に従う道を歩みます。

3 和解

サウルを手にかげなかつたこと、殺さなかつたこと、このことがサウルとの和解をもたらしめます。サウルの言葉です。

主がわたしをお前の手に引き渡されたのに、お前はわたしを殺さなかつた。自分の敵に出会い、その敵を無事に去らせる者があるのか。今日のお前のふるまいに対して、主がお前を恵みをもって報いてくださるだろう。今わたしは悟った。お前は必ず王となり、イスラエル王国はお前の手によって確立される（一九―二二節）。

サウルはここで、ダビデがサウルを殺せる立場にありながら殺さなかつたこと、敵に出会いながらその敵を無事に去らせたことを、ダビデの「善意」あるいは「正しき」と認めています。

まさに和解と行ってよいと思います。聖書で使われる和解という言葉には、状況を

今とは別のものにするという意味があります。サウルとダビデの間には、とくにサウルには、ダビデに対する敵意、怒り、殺意しかなかった。しかし今やそれは好意、互いに赦しあうこと、そして平和に変えられるのです。

和解です。ただここで和解そのものが最終的な目標と考えられていません。さし当たり和解ととらえてよいと申し上げた通りです。ダビデが必ず王となり、ダビデのもとでイスラエル王国が確立されるとサウルは断言しています。神の救いの計画が行われること、貫かれること、それが問題の中心です。ダビデが救いの歴史の中心になっていきます。

この和解、仲直りが、ダビデの側から起こったことに注意したいと思います。第三者による仲裁とは違うのです。

和解のためにダビデも誘惑を排除し、あるいは試練を乗り越えなければなりません。誘惑、試練とは、先に触れたように、いい機会だ、殺してしまえという兵士たちの声、世論です。「ダビデは立って行き」（五節）という言葉に先ほども注意しました。ダビデは、兵士の声に押されて、それを受けて立って行って、サウルを手にかげようとしたと想像されます。

そのとき大変な内面の葛藤が生じます。立って行って、というとき、どういう気持ちであったかは書いてありませんが、ダビデは自分と戦いながら立って行った。その途中、殺してしまえという兵士たちの声を克服して、サウルに手をかけることをせうに上着の端を切っただけにとどめたのです。和解というのは、仲直りというのは、そうした自分との戦いに勝って起こるのです。兵士らのようにひと思いにやっつけてしまえたら、一気に問題は解決、一時的にはスッキリしたかも知れない。しかし大切なのは神の御心に従うことです。サウルを殺すことは御心ではない。御心に従って、敵を無事に去らせた、その先に和解は生まれたのです。

誘惑と試練に打ち勝ち和解をもたらした方として、私どもはここでイエス・キリストを思い起こすべきではないでしょうか。

福音書が証しているように、救い主イエスも試練や誘惑に会われたのです（ヘブライ四・一五）。イエスの場合もダビデの場合と同じ、主なる神に従うか、別の道を歩むのかということです。イエスは洗礼を受け宣教に赴く直前、サタンの誘惑に遭います。サタンはちよつとでもわたしを拝むなら、この世のものはみんな与えようというのです（マタイ四・九〜一〇）。生涯の終わりにもイエスはゲッセマネの祈りで自分と闘っています。そこでもイエスは、それに打ち勝ち、わたしの思いではなく、御心に適うことが行われますようにと祈り、主なる神に従い、十字架の道を歩んでいきました。

ダビデが兵士たちの声を振り切って、誘惑を振り切って、それに打ち勝ち、御心に従い、サウルに手を下さなかったこと、兵士にも手を下してはならないと説き伏せたこと、そこにサウルとの和解の道が開かれたのです。